



秋田県立  
花輪高校

キャリア教育

◎1926(大正15)年、花輪町立花輪実科高等女学校として開校。48年に男女共学となり、現校名に改称した。校訓は「誠実・友和・創造・英気」。「部活の花輪」といわれ、特にスキー部、陸上部は全国大会で活躍する強豪である。

設立	1926(大正15)年
形態	全日制/普通科/共学
生徒数	1学年約145人
2014年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、北見工業大、弘前大、岩手大、秋田大、山形大、茨城大、新潟大、釧路公立大、青森公立大、岩手県立大、秋田県立大、宮城大などに22人が合格。私立大は、北海学園大、弘前医療福祉大、盛岡大、秋田看護福祉大、東海大、早稲田大などに延べ41人が合格。
住所	〒018-5201 秋田県鹿角市花輪字明堂長根12
電話	0186-23-2126
Web Site	<a href="http://www.hanawa-h.akita-pref.ed.jp/">http://www.hanawa-h.akita-pref.ed.jp/</a>

# 振り返りと評価指標を重視したキャリア教育で社会人に求められる力を育む

## 変革のステップ

### 背景

◎少子化の影響で全入の状態が続き、成績上位層の生徒も減少。県の指定を受けて本格的なキャリア教育に着手する

STEP 1

### 実践

◎キャリア教育を体系化し、実効性のある活動に。振り返りや評価指標の工夫によって、生徒に成長実感を持たせた

STEP 2

### 成果

◎評価指標の結果を指導改善に生かすノウハウが確立。キャリア教育の要素を取り入れた授業改善も進め、生徒の学習意欲を高める

STEP 3

## 県の指定を受けて本格的なキャリア教育に着手

秋田県立花輪高校は、秋田県北東部に位置する鹿角市にある地域の中核校だ。卒業生の進路は、国公立大進学から就職まで幅広い。半数が大学・短大に進学する一方、高い学力を持ちながら地元で公務員を目指す生徒もいる。

進学指導に対する地域からの期待は高いが、少子化の影響により、ここ数年、全入の状態が続き、更に難関大進学を目指す生徒が近隣の進学校に入学する傾向にある。進路指導主事の赤坂俊彦先生は次のように話す。

「本校は地域に根差した学校です。鹿角市の未来を担う人材をこの学校から輩出することが、私たち教師の願いです。本校の生徒たちは真面目で素直、言われたことにはきちんと取り組みますが、自信のなさから、いざという時に実力を発揮できないこともありま

す。自信を持って高い目標に挑戦できる生徒を育てることが、本校に課せられた使命だと考えています」

折しも2012年度、秋田県の「キャリア教育実践モデル校」の指定を受けたことが、同校の転機となった。進学実績の向上と学校活性化の起爆剤としてキャリア教育を位置付け、「チャレンジし続ける人間の育成」をテーマとした学校改革に着手したのである。

## キャリア教育を体系化し 活動の狙いを教師・生徒で共有

改革は、「総合的な学習の時間」を中心に行うキャリア教育の体系化から始まった(図)。それまでも社会人講話などの進路行事を行っていたが、取り組みの狙いが明確ではなく、それぞれの活動のつながりもあいまいだった。そこで、12年度、年5回の「針路の日」を設けた。4月は弘前大訪問と進路研究、7月は進学希望者対象の進研模試、就職希望者対象のマナー講



**伊藤孝紘** いとう・たかひろ  
秋田県立花輪高校  
教職歴5年。同校に赴任して4年目。2学年担任。『自分自身も学習者として、これからも学び続けるべく姿勢を見せていきたい』



**佐藤敦史** さとう・あつし  
秋田県立花輪高校  
教職歴22年。同校に赴任して9年目。2学年主任。『思い』だけで終わらせずに、『形』にすることを心掛ける』



**大野聡** おの・さとし  
秋田県立花輪高校  
教職歴26年。同校に赴任して3年目。1学年主任。『対話し、受けとめ、励ます。否定することから始めない』



**赤坂俊彦** あかさか・としひこ  
秋田県立花輪高校  
教職歴19年。同校に赴任して4年目。進路指導主事。『この学校で学んだ生徒たちが将来の地域(鹿角市)をつくる』という信念で臨む』



習、8月はスタディーサポート及び就職・公務員試験対策と、年間計画を立て、それぞれ丸1日を充てた。

「意識したのは、取り組みの意味を明確にし、それを教師間で共有することです。どの時期に何をどのような目的でするのかを明らかにすれば、先生方の意欲も高まり、形だけの活動にならないと考えました」(赤坂先生)。例えば、社会人講話は「キャリアプランニング能力の促進や、自分の将来の姿を本気で考える一助とする」ことを目的に掲げた。この狙い

は、生徒にもしっかりと伝える。どのような力を付けるための活動なのかを生徒が理解できれば、自分の成長を実感できると考えたからだ。

更に、全ての進路学習で振り返りの時間を設け、生徒の成長実感をより確かなものにしていく。社会人講話の感想、オーブンキャンパスの記録、模試や定期考査の成績などは、プリントに記入し、専用ファイル「キャリアノート」に綴じる。プリントの基本フォーマットは校内LANのサーバーに入っており、担任は必要に応じて印刷して生徒に配布する。活用法は担任に任されており、フォーマットの中身を変えてもよい。2学年担任の伊藤孝紘先生はこう話す。

「以前は全てのプリントがまとめられたノートを使っていたのですが、経費の面から14年度は活動ごとにプリントを印刷して配布し、ファイルに綴じるスタイルにしました。ノートの時よりも提出率やチェックの効率が良く、担任の負担軽減につながりました」

活動の振り返りに加え、書く機会を増やして、表現力の向上を図ることもキャリアノートの狙いだ。同校の生徒は、1年生から書く指導を徹底しているため、文章表現をいとわないという。13年度からは、ベネッセの語彙・読解力検定を導入し、社会人として必要な読解力や表現力の育成も図っている。将来的には、推薦・AO入試を見据えた小論文・志望理由書対策にも活用していく考えだ。

## 「花高チャレンジングリスト」で 社会人として必要な力を定量評価

取り組みの評価を数値で測定し、指導改善に生かしているのも、同校の大きな特徴だ。

秋田県立由利高校のCan-Doリストを参考に、同校独自の要素を加え、生徒の自己評価ツール「花高チャレンジングリスト」を作成した。最大の特徴は、文部科学省がキャリア教育で育成すべき力として提唱する「基礎的・汎用的能力」と関連付けている点だ。キャリア教育に関する評価項目を、大きく「学校生活と人間関係」「学習への取り組み」「進路計画とその実践」「部活動、体験活動、地域とのかかわり」に分け、それぞれ細かい評価項目を設定(全64項目)。更に、その項目1つひとつに基礎的・汎用的能力の4つの力(A人間関係形成・社会形成能力、B自己理解・自己管理能力、C課題対応能力、Dキャリアプランニング能力)を対応させて、どの力がどの程度付いたのかを定量的に測定できるようにした。

これを生徒の自己評価に活用するだけでなく、集計結果を項目別・能力別にグラフ化し、具体的な指導改善に結び付けている。例えば、12年度は、どの学年も人間関係形成と社会形成能力の肯定率はほぼ8割を超えたが、一方で課題対応能力とキャリアプランニング能力の肯定率は6割前後にとどまった。そこで、13年度に

2つの新しい取り組みを導入した。

1つは、「定期考査の前に計画を立て、取り組んでいる」の項目の肯定率が全校で40%と低かったことを受け、定期考査前に学習計画表を作成するようにした。具体的には、教師が用意したフォーマットに、生徒が定期考査に向けた学習計画を記入して提出。担任は1つひとつ確認してアドバイスを書き、適切な計画が立てられるよう支援する。1年間の継続で、13年度と同項目は学校全体で17ポイント、1年生(現2年生)だけでは30ポイントも肯定率が上がった。

もう1つは、1年生3学期に行う「テーマ研究」だ。進路を問わず、1年生全員がそれぞれ関心のあるテーマ、進路にかかわるテーマについて調べ学習を行い、発表する。テーマは「プロレス」「ネイルアート」など趣味にかかわるものから「少子高齢化」「エネルギー資源」などアカデミックなものまで様々だ。学級発表をした後、優秀な生徒を各クラス8人選抜し、2年生の学校祭で発表する。

テーマ研究の狙いは、課題対応能力を身に付けさせることだけにあるのではない。生徒一人ひとりが発表を通して「先生」になり、生徒同士で刺激し合うことにもあると、2学年主任の佐藤敦史先生は強調する。

「本校の近隣には大学がなく、生徒がアカデミックな刺激を受ける機会はほとんどありません。生徒一人ひとりが『リトル教授』に

なり、他の生徒に研究成果を教える機会があれば、大学教員を呼ばなくてもアカデミックな雰囲気を校内でつくれると考えました。また、下級生が発表の様子を見て、関心を深める楽しさを感じてほしいと思います」

今後は3年生前半にもう一度テーマ研究を行い、更に研究を深めさせる予定だ。

## 地域連携を強化することで 学校の「味方」を増やす

キャリア教育を進める上で同校が大切にしてるのが、地域とのつながりだ。13年度には鹿角市社会福祉協議会と連携し、1人暮らしの高齢者宅を訪問し除雪ボランティアを行った。この年、県の降雪量が多かったこともあり、生徒の除雪作業に泣いて喜ぶ人もいた。取り組みを主導した1学年主任の大野聡先生はこう語る。

「元々はPTAとの懇談会で『学校は地域に何も還元していない』と指摘を受けて始めた取り組みでした。人から感謝されることで、生徒は自分も社会の役に立てるという実感を持つ良い機会になったと思います」

他にも、3年生の就職希望者に年1回、模擬面接を行うが、その際、PTA役員に協力を依頼し、面接官になってもらっている。14年度は9月にPTA役員7人が来校して実施した。教師も面接官を務めるが、教師以外の社会人が相

手となると、生徒の緊張感は全く異なり、本番を想定した練習として大きな効果があるという。

「我々が重視するのは、地域との連携によって生み出される一体感です。地域の人と一緒に何かをすれば、学校の応援者になってくれます。地域連携を強化して以来、住民からの苦情の電話が少なくなりました。鹿角市も少子化で学校の統廃合が現実味を帯びつつあります。本校が生き残るためには、地域を巻き込んで学校との絆を強くすることが、これまで以上に大切になるはずです」(赤坂先生)

## 社会人として必要な力の育成を教科授業でも目指す

14年度、キャリア教育は通常の授業にも波及した。全教科でアクティブラーニングを取り入れ、課題対応能力・キャリアプランニング能力を中心とした基礎的・汎用的能力の育成を目指している。

「進路学習を増やすのは、教師にとっても負担が大きく、また、14年度で県からの指定も終わるため、予算面も縮小しなければなりません。授業で生徒同士が教え合って理解を深めたり、協同で課題を解決したりする中で、基礎的・汎用的能力の向上と教科学力の向上を両立させたいと考えました」(赤坂先生)

14年4月、アクティブラーニングに詳しい大

## 情熱 若手教師が語る、指導変革への

### 自分で納得できる指導を目指し 1年生からの持ち上がりを志願

2学年担任 伊藤孝紘

私の初任校は本校で、1年目は2年生を受け持ち、そのまま3年生に持ち上がりました。最初の2年間は無我夢中で指導に当たり、今も思い返すと、学校に慣れることに精いっぱい、忙しさを理由に流れに身を任せていただけだったように感じます。生徒を卒業させてからも、もっと力を伸ばせた生徒もいたのではないかと、もっと生徒に合った進路があったのではないかと反省ばかりが頭をよぎりました。

自分なりに納得できる指導をしたい。そういう思いから、赴任3年目は1年生の進学クラスの担任を受け持ちたいという希望を出し、かなえていただきました。それからは、3年後の進路選択までを見通した指導を行うように心掛けています。

本校の良さは、ベテラン教師と若手教師がバランスよく在籍していることだと思います。分からないことは先輩がアドバイスしてくれます。新しいことをやろうと考えた時に一緒になって動いてくれる若手教師も多く、自分の力を磨くには絶好の環境だと思います。

今後の課題は、アクティブラーニングを通して、大学入試に通用する英語力を身に付けさせることです。そして、何よりも、高校在学中にコミュニケーションの手段としての英語を習得できるよう、生徒のキャリア形成をサポートしていくつもりです。1人でも多くの生徒が志望を実現できるよう、精いっぱい指導に打ち込んでいきたいと思っています。

学教員を招いて研修を実施。以来、全教科でアクティブラーニングを取り入れようと試行している。物理では授業の約半分が生徒同士の対話や活動になった。地歴・公民ではタブレットを使ったディスカッション中心の授業が浸透しつつある。伊藤先生は担当する英語の授業で、従来の訳読中心の授業法をがらりと変え、小集団でのディスカッションやグループワークを多用している。そうした授業の変化により、生徒はより積極的に授業に参加するようになった。

「物理では生徒の授業評価が大きく向上し、特に下位層の学習意欲や学力が目に見えて高まっています。ただ、入試対応力の向上にまで結び付くのは、まだ分かりません。そこ

が課題の1つですので、今後の結果などをしっかり検証したいと思います」(赤坂先生)

現状の取り組みを更に精選し、より実効性のあるキャリア教育を進めることも課題だ。

「チャレンジすることの大切さや社会人に求められる力に対する生徒の意識は高まっています。全員の取り組みが生徒の学力向上に結び付いているわけではありません。そのことを教師一人ひとりが自覚し、生徒に必要なことは何かを明確にしていかなければ、本当の改革は実現できません。今まで以上に生徒の進路に対する思いを強め、保護者とも連携を図りながら、より実効性のある進路指導を構築していきたいと思っています」(佐藤先生)

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2010年6月号指導変革の軌跡「大分県立日田三隈高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け